



スルーパス

視界の端にボールが見える。

ボールが視界の中央に近づいてくるのに合わせて、後藤凜は足の回転を早めた。

届くのか、ボールの方が早いのではないか。そんな思いが頭をよぎる。

もうボールは体のほぼ正面まで来ている。

自分の足も同じ視界に入る。

このままではボールは自分の前を通り過ぎていくだろう。

そう思った瞬間、前に出した右足をそのまま地面に着けずに思い切り前に伸ばした。

後藤凜がフットサルに誘われたのは派遣先の社内だった。

ベンチャーと呼ぶにはもう設立から時間が経っているシステム販売会社は、社員も数十名になっており、すでに中堅企業と言ってもよい規模となっていた。それでも比較的若い社員が多く、活気に満ちている一方で、企業としての様々な要素がまだ身の丈に合っていない雰囲気もあった。

それはたとえばオフィスの入口にある海外製のどこを押したら良いのか分からない受付用の内線電話だったり、企業ロゴを大きくあしらった金属製の看板だったり、どこか借り物のような感じからくるものなのだろう。たぶん、それがフィットしてくるまでにはある程度の年月が必要で、人間と同じように年季というものが必要なのだろうな、と凜は毎日通いながら思っていた。

そうした企業に派遣されるのは初めてではない。もっと小さな会社もあったし、社員数は多いもののまだ出来ばかりで行く末も心配になるような会社もあった。どちらかと言えば、いまの会社はまだ余裕があって長く働ける期待が持てる。

凜の業務は内勤で営業担当者の補佐だ。取引先からの問い合わせを受けたり、営業担当者が持ち歩く新しいシステムの資料作成を手伝ったり。もちろん楽しいことばかりではない。取引先からは苦情を受けることもあるし、営業担当者がミスを認めずトラブルが拡がっていくこともある。それでも、20代も半ばを過ぎて自分がこれまで働いてきた経験がそうしたトラブルの場で役立っているという自覚はあるし、そのように派遣会社からも派遣先からも評価を伝えられたこともある。

このまま次の派遣期間の更新をしてもよいかという気にはなっていた。

「後藤さんもいかがですか？」

凜がそう声をかけられたのは、定時を過ぎて仕事の残りもほぼ片付け終えようとしていた時だった。

「何の話？」

先ほどから若手の男性社員ふたりが女性社員たちに仕事以外のことで声をかけていたのは気付いていたが、内容までは聞いていなかった。

「フットサルですよ」

声をかけてきた男性社員、藤田の脇からもう一人の男性社員、加藤が顔をのぞかせるようにして言った。このふたりが中心になって周りに声をかけているようだ。

「フットサルってサッカーみたいなもの？」

確か小さなコートでやるサッカーをそう呼ぶのだと聞いた覚えがあった。

「まあ、そんなもんです」

藤田が答えた。あまりサッカーと一緒にされたくないのか、その答えを正解とは言いたくないようなニュアンスを感じた。

営業リーダーの藤田は、凜より2つくらい年下だったはずだ。仕事ぶりはともかく、場を和ます明るさとこの若い社内では比較的年長者ということでのポジションだった。

「たまには社内でレクリエーションみたいなものもいいかなって思いました」

確かにこの会社では花見や社員旅行といった社内行事のようなものはなかった。それが今風でもあるのかと思っていたが、会社ができたばかりでしゃかりきに働かざるを得ない時期にはそうした余裕もなかったのだろう。次第に会社も軌道に乗ってくると、多少余裕もできてきて、古くからの企業のような社内行事へのあこがれのようなものが若い社員たちの間に出てきたのかもしれない。

凜が少し視線をずらすと、さっきまで彼らに声をかけられていた女性社員ふたりがこちらの様子をうかがうように見ている。彼女たちもまんざらではないのだろうが、簡単に誘いに乗っては軽く見られるからと少し迷っている振りをしていたようだ。彼らは彼らで説得するのも面倒になってきて彼女たちより年上で派遣社員という立場の凜にも声をかけてみたということのようだった。

「まったくやったことないけど」

それでも良ければ、という前向きと取れる答えに、加藤は

「大丈夫っすよ。是非是非」

と目を輝かせた。まだ2年目の営業マンの加藤には若さと勢いが強く感じられる。

早速、加藤は女性社員たちの方に振り向いて改めて説得を再開した。彼女たちも誘いに乗るきっかけができたことだろう。

じゃあ、日時や場所とか詳しいことはメールで、とホッとした表情で感謝を表しているような藤田に伝えると、凜は仕事の残りの片付けを再開した。

フットサル場は会社近くのショッピングビルの屋上だった。平日仕事を定時に終えて参加者みんなで移動した。もっとも何人かは仕事が終わらず後から合流となった。

薄暮の街並みをバックに人工芝の緑色が明るく輝いている。凜も何度か帰りに寄ったことのあるショッピングビルだったけれど、こんな施設があるとは知らなかった。

テニスコートくらいの広さの人工芝のフィールドを緑のネットが高く囲っている。よく見ると天井にあたるまで囲われている。これならボールが外に飛び出すこともないだろう。

本当のフットサルは体育館でやるんですけどね、と藤田はフットサル場の入り口でつぶやいた。どうやら彼はサッカー経験者らしく、今回の催しの中心となっていた。

決して広くはないけれど割ときれいな更衣室もあり、そこで着替えをした。男女別になっていると言うことは女性の利用者も少なくないのだろう。

服装は体を動かせるものなら何でも良い、とのことだったので、凜はジョギングをしていた頃のウェアの上にジャージを羽織り、足下も同じくジョギングシューズにした。

ジョギングは以前の会社で同じ派遣社員の女性に誘われて始めた。どうやらその女性の勤めていた部署の気になる男性がジョギングを趣味にしており自分も始めようと思い立ったものの、ひとりでは心細いと凜に声をかけたようだった。

そんな女性の下心には気付いていたが、ちょうど運動をほとんどしていなかったし仕事にも慣れてきた頃だったので、良い機会だからと誘いに乗ることにした。

凜は学生時代の運動着を引っ張り出しても良いかと思ったけれど、誘ってきた女性に止められ、一緒にスポーツショップにまで行ってウェアを選ぶ羽目になった。さすがに気になる男性がいるだけあって、彼女はきらびやかなウェアを何度も着替えながら、どれが魅力的に見えるか、男性の好みから外れていないか、尋ねてきた。その男性の好みを凜が把握しているはず無いのだけれど。

これでは普通の服選びと変わらないな、と思いながら、凜はいつまで続けるか分からないからと安くてシンプルなウェアとジャージを選んだ。

その後、仕事を終えてから何度か女性と会社近くの公園に一緒に行ってジョギングをした。公演にはいくつものジョギンググループがいて、危険を感じることも初心者が気後れすることもなかった。近くには銭湯があり、仕事帰りにジョギングを楽しむ人向けにロッカーも用意しており、ジョギング後には汗を洗い流すこともできた。

程なくして、彼女の方は無事ジョギングを通して目的の男性と付き合うようになり、目的を達成したからかジョギングはすぐに辞めてしまった。

凜はやれやれと思いつつ、せっかく始めたのだからとしばらくはひとりでもジョギングを続けていたが、派遣先の職場が変わったことで同じ公園に行くのが難しくなり、新たに場所を探すほど気に入っていたわけでもなく、そのまま辞めてしまった。

久しぶりに袖を通したウェアとジャージだったが、あまりきつくはなっていなかった。

更衣室の中を見回すと、やはり参加することにした数名の女性社員たちがどこかのプロサッカーチームのユニフォームを着て、彼氏から借りてきただの、この機会に本格的にやってみるんだと意気込みを語るなどしてはしゃいでいた。確かにユニフォームは似合っていたけれど、みな細身で手足がすらっと長く、プレーする選手と言うより、テレビなどでユニフォームを着て応援している女性芸能人たちを思わせた。

凜だけ脚を隠す服装になってしまったようだけれど、それが正解だったかもしれない。

最近入ってくるようになった女性社員は、誰もが若くすらっとしてきれいな印象の女性ばかりだった。社外からは社長の趣味などと揶揄されているようだけれど、みんな男性社員と同じく営業の外回りをこなし、取引先からの評判も良かった。そうした業務を嫌がるようなこともなく、仕事での苦勞もこれからの

自分の糧にしていこうという意欲は同じくらいの男性社員よりも貪欲に感じられることもあった。

凜が更衣室を出るとすでに男性陣はすでに人工芝の上でボールを蹴ったり準備運動をしたりしていた。すぐにネットの中に入ってよいものか迷ったので、ネットの外で準備運動を始めた。といってもジョギングをしていたときに周りから教わった簡単なものだ。

屈伸から始めてアキレス腱を伸ばし、前屈から体を横に倒して脇腹を伸ばし、腕を反対の肩の方に持って行き、二の腕の外側を伸ばす。要するに体のあちこちを伸ばしていけばいいのだ。

足首や膝も回し、そろそろ準備運動のネタも切れそうだな、と思っていたところで、更衣室に残っていた女性社員たちが出てきた。

それを見ていたかのようにネットの中にいた藤田が

「集合してください」

とネットの外にも聞こえるように声をかけた。

ネットの切れ目から中へ入り、男性陣に倣って輪になって立つ。女性は凜も入れて5名、男性が7名、遅れてくる人も入れれば16名くらいになるのだろうか。

「お疲れ様です」

藤田がそう言うと、みんなで「お疲れ様です」と答える。これは職場での挨拶と同じだ。

「平日にも関わらずよく集まってくれました。ありがとうございます」

かしこまって挨拶すると、はやすような声が飛んだ。その声に照れたような表情を見せながら、

「初めての人もいると思うんで、簡単に自己紹介だけお願いします」

そう言って輪の端から自己紹介が始まった。順に部署と名前を、人によっては「久しぶりなので」「未経験なので」などとひと言アピールを添え、言い終わるとみなでパチパチと短く拍手をする。

女性陣の中では凜がいちばん最初に順番が来た。

「営業部でアシスタントやっています後藤です。初めてなのでよろしくお願いします」

短い拍手。あとに続く女性社員たちがやりにくくならないよう簡単にしたつもりだったが、あまり心配する必要はなかった。女性社員たちはそれぞれ個性的なアピールで場を盛り上げていた。女性陣はみな初心者のようなようだった。

どうも見たことのない顔もいると思ったら社内だけでなく取引先にも声をかけていたようで、後半の何名かは社名と名前を告げた。こういうのも接待というのだろうか。ゴルフなどではよく聞くけれど。

「フットサルは本当は5人对5人ですけど、女性や初心者も入っているので6人对6人の10分1セットで始めましょう。キーパーは男子で。その他の細かいルールもサッカーと同じで楽しく怪我のないように」

藤田がそう言うと男性陣と女性陣で分かれてジャンケンをしてチーム分けをした。凜は女性3人のチームに入った。

ゲームが始まった。

どちらのチームも女性陣を攻撃側にしたため、転がるボールに女性数人が群がり、足元のボールを蹴ろうとしては何度も空振りしたり思わぬところに当たって逃げるボールを追いかけたりした。

それを少し離れて男性陣が見ている、たまに転がってくるボールを自分たちで何度かパスしたあと、再び女性にパスして、やはり空振りしたり、群がったりすることを繰り返した。次第に女性陣が疲れて動きが鈍くなってくると、男性陣がゆっくりと動き始めた。男性陣の中で初心者に近い人を攻撃側に走らせ、先ほどまで女性陣に出していたようにパスを出すようになった。

そのパスのスピードは女性に出していたよりずっと速かった。女性向けにわざと緩いパスを出していたのだと、そのとき気がついた。馬鹿にされたとも優しくされたとも思わなかった。たぶん、それが当たり前でそういうものなのだ。

初心者に近い男性陣が疲れてくると、次第に経験者らしい男性陣も攻撃に加わるようになってきた。パス

がさらに速くなり、ゴール前まで走り込んだ男性がシュートをするのも見られるようになった。バン、という音と共にゴールの脇を抜けていくシュートは、それまでのどのパスよりも速かった。あれが当たったとしたらとても痛いだろう。ゴール前を守るキーパーを女性にしないのもうなずける。その後は再び女性陣や初心者にもパスを出すようになって、最初の10分を終えた。



とても10分とは思えないくらい長く感じた。

遅れてきた男性社員も入ったので、さすがに人数が多すぎると、初心者、特に普段から体を動かしていない人は無理しないようにと、何人かは休んでネットの外から見ていることになった。もちろん、コートの外から時間をきちんと計るという役目もあったけれど。

凜は久しぶりに運動したからか、だいぶ汗をかいたので最初に休むことにした。女性陣の方では年長の方だし、先に休んだ方がいいだろうという判断もあったし、なによりこの競技を外からきちんと見てみたかった。

ゲームが始まった。

先ほどと違って、最初から男性陣が中心になってボールをパスするようになった。はじめの10分は女性向けと割り切っていたのだろう。

素早いパスが男性の間で回され、真ん中で少なくなった女性陣がどこへ行けばいいのか戸惑っているようだった。

外から見ていて分かったのは、パスというのはボールを足で止めることと蹴ることの組み合わせだということだった。ボールはいつも蹴るものだと思っていたし、凜も含めて女性陣は自分の足元に転がってくるボールをそのまま蹴ろうとして空振りしたり変なところに当たって思わぬ方向へボールが飛んでいったりしていた。それは、いまコートの中にいる女性たちも変わっていない。たまに足元に転がってくる緩やかなパスを思い切り足を振り上げて蹴ろうとして空振りしたり真横にボールが飛んだりしている。

経験者の男性たちを見ていると、足の内側や外側、もしくは足の裏で転がってくるボールを止めて、それからボールを蹴りたい方向に向けて蹴っているようだった。止めるのに失敗して大きくボールが跳ね返ると、相手チームが素早くそのボールを拾って攻守が逆転する。女性陣のようにポロッと転がったボールを両チームで取りに行くようなことはほとんどない。たまにボールを止めずに蹴ることもあるが、その時も足の内側で狙ったところに跳ね返しているように見えた。

シュートも同じ理屈だ。ゴールの前でボールを止めてゴールに向かって蹴る。もしくは、止めずに足の内側でゴールに向かって跳ね返している。もっとも、キックがあまりに速くて足のどこで蹴っているのかわからないシュートもあったけれど。

そのうち経験者の男性たちはパスだけでなく、ボールを小さく蹴ってボールと同じスピードで走る動きをするようになってきた。ボールに追いつくとまた小さく蹴ったり、急に方向を変えたりする。その間、ボールは足にくっついてるように動く。これがドリブルというものだろう。サッカーの試合のテレビ中継では足元などに目が行くことはなかったが、これだけ近くで見ていると、どのようにボールを動かしているのかも分かる。

パスの間にドリブルが入るようになって、ボールはさらに速く動くようになった。パスを受けてドリブルを開始し、相手の前で味方に向かってパスをする。動きながらのパスは難しいのかもしれない。味方のいないところにパスをして相手の攻撃になってしまうような場面も増えてきた。

10分が終わった。

プレーしていた女性と入れ替わりで凜は緑のネットをくぐるように中に入った。若い彼女たちもさすがに疲れたようだった。

凜は人工芝の上で軽く屈伸しながら、先ほど外から見ていたパスの動作を思い返していた。もし機会があったら、あの動作を試してみようと思っていた。

ゲームが始まった。

機会は意外に早く訪れた。ゆっくりしたパスが男性陣の中で繰り返されたあと、いちばん後ろの男性から凜に向かって同じようにゆっくりしたボールが蹴られた。正面から向かってくるボールに対して右足の内側を向けて待ち受ける。

トン、とボールが足に当たってその場で止まった。

おっ、という声にならない声が男性陣から漏れた。

ボールを止めることはできたものの、パスするには誰かに向けて蹴らなくてはならない。凜は誰に向かって蹴れば良いのか分からず、考える間もなく、そのまま右足の内側を前に押し出すようにして自分に向かってパスをくれた相手に向かってボールを蹴った。

ボールは力なく相手の足元まで転がり、足の裏で踏むように止められた。

ナイスパス、と声がかかる。凜は息を大きく吐いた。ボールが向かってきてから今まで息を止めていたことに気付いた。

ひとつ肩の荷が下りたような気がした。新しいことができるようになるのは気持ちが良い。次はもう少しうまくできそうと言う気持ちにもなれる。

その後、何度か男性陣からパスをもらった。先ほどのプレイのせいか、他の女性たちより多くもらえるようになったようだった。先ほどのように弱々しいパスでなく、より強くボールを蹴ることを意識した。うまく足元で止められず大きく跳ね返ってしまうこともあったし、ボールを強く蹴ろうとするあまり思いがけない方向にとんでいってしまったりした。

さらに男性陣のように動きながらパスを受けようとしたけれど、さすがパスが来た瞬間にその場に立ち止まりパスを待ち受けることしかできなかった。

それでも、最初の10分間とはまるで違うゲームに感じられた。どこからパスが来るのか、来たらどうするのかを絶えず意識するようになった。ひとつのプレイができるようになるだけで、これだけ周りの風景がはっきり見えるようになるような視野の広がりを感じられるとは驚きだった。

軽くない興奮を覚えながら、10分間が終わり、凜はコートの外に出た。

続けてプレイをしたい気持ちもあったけれど、今度は若い女性たちの順番だったし、凜はできるようになったプレイの次は何ができるようになればよいのか、外から見て知りたかった。

次の10分が始まった。

男性陣は慣れてきたのか、お互いに声を掛け合いながらプレーするようになってきた。

パスを出すとき、パスをもらうとき、ダッシュをしながら「右！」や「左！」と叫んでコートの端を走って行く。時には「後ろ！」と声をかけて後ろにパスをさせたりもする。

見ていると目立つ動きをしている人がいることに気付いた。いや、他の人とは違う動きをしているというだけで殊更動き回っているわけではない。どちらかといえば動かないことで目立っている。

場所は自分の陣地側で守備を担当していると言えるだろう。他の男性陣が守備の時も動き回ってボールを足元に置く人の前に立ちはだかったり、ドリブルで攻め込んでくる人と併走してボールを奪おうとしたりするのに比べると、ほとんど動いていないように見える。

それでいて少し場所を移動したかと思うと、相手のパスが足元に来る。それを受けて、すぐに味方にパスをすると、また元の場所に戻っている。

最初はなぜ相手がその人にパスをするのか不思議だったけれど、よく見ているとパスを出す瞬間に移動していることが分かった。その動きが自然で何気なく場所を変えただけのように見えるので、相手がその人にパスを出してしまったかのように見えるのだ。

自己紹介の際に、総務経理の村松と名乗っていた社員だった。白髪も目立ち始めた髪は短めで、若くは見えるけれど40歳は過ぎているだろう。細身であり運動をしているようには見えない。いまコートの中にある姿を見ても、スポーツマンという印象はない。

凜は社内ではほとんど村松と関わりがないし言葉を交わした覚えもない。業務の中身をきちんと知っているわけでもないのだが、取引先との書類の不備を担当する営業に指摘している様子は何度か見ている。そんな村松のコートの中のプレイを見てみると、何となく相手のパスを何気ない動きで取ってしまう動きが、社内でトラブルが大きくなる前にその芽を摘む村松の仕事につながっているような気がしてきた。

そう思うと、他のメンバーもどこことなく社内の印象につながるような気がしてくる。営業の若手の加藤は元気にパスをもらおうと声を出しながら走り回っているし、営業でリーダーの藤田はチームメイトに指示を出しながら自分も楽をせず走り回っている。

次の10分、凜は村松の動きを真似してみることにした。

あまり攻撃の方へ行かずに、自分のチームのゴールに近い方にいて周りの動きを注意深く見る。ボールが相手に渡り、攻撃を受ける側になったときにボールを持っている人の動作を見て、パスを出そうという瞬間にその方向で動く。

最初に試したときは、動き出すタイミングが自分でも分かるくらいに遅く、凜が動こうとしている場所に移動することもできず、ボールは離れたところを通り過ぎていった。

二度目は少し近づいたが、足を伸ばしても届かないところをボールは通り過ぎていった。

三度目は動き出すタイミングを早くしようとするあまり、一步踏み出した途端、別の方向にパスを出され、コートの反対側でプレーがつながっていった。

さすがに見るのとやるのでは大きく違う。そんなに簡単にできると思ったのが間違いだったかと自分でもちょっとおかしくなって、凜は小さく息を吐いてコートの外を見た。

順番で休憩していた村松がスポーツドリンクを持ってこちらを見ていた。目が合ったような気がしてとっさに目を逸らしてしまった。何か恥ずかしいことをしていたことを見つけてしまったかのような気まずさを感じた。

さすがに続けてプレーしているのも厳しくなったのか、全員で休憩する時間になった。

凜は何をしてよいのか分からず、他の人の邪魔にならなそうなところでストレッチを始めた。始める前の準備運動と同じようなものだ。

日はすっかり落ちて、周りはすっかりビルばかりの夜景になっている。その谷間にあるフットサルコートはライトに照らされてより緑が鮮やかに輝いていた。

人工芝ではあるのだけれど、ビルの谷間に緑があるとホッとするものだな、と思った。

その時、ふと自分の頭の中がすっきりクリアになっていることに気付いた。

以前、ジョギングをしていたときは、周りの景色を楽しんだりしても、自分のスピードではそれほど頻りに景色が変わるわけでもなく、何度も繰り返し同じところを走っていれば次第に飽きてしまう。

そうすると走りながら他のことを考え始めてしまうのだが、たいてい嫌なことばかり頭に浮かんでくる。その日に仕事で失敗したこととか、友人とうまく話せなくなっていることとか。一旦浮かんでしまうと、そんなことが次々と昔のことまで浮かんできてしまい、頭の中が一杯になってしまう。走り終えても、浮かんできてしまったことはまだ頭の中に残っていて、身体は良い汗をかいているのにどうしてもすっきりした気分になれなかった。

ジョギングを辞めてしまったのは、そんな理由もあったのかもしれない。

それに比べると、フットサルコートに立っている間、何か他のことを思い浮かべることはなかった。というより、そんな余裕がなかったというのが正しいだろう。

慣れればそんな余裕が生まれることがあるのだろうか。男性たちのプレイを思い返すとそんなことはしばらくなさそうに思えた。だったら、このまま続けられるのかもしれないな、と思った。

村松がスポーツドリンクのペットボトルを片手に近づいてきた。

なんとなく悪さをした子供のように身構えてしまう。

「後藤さんだっけ」

「はい」

「今日は初めてなんでしょ」

「そうです」

「他にスポーツの経験は？」

「いえ、特に。しばらく前にジョギングをやっていたくらいで」

「ふうん」

「なにか？」

「いや、初めてにしては色々と考えてプレイしているなと思って」

「そうですか？」

「そうだよ。だから、ほら」

村松が視線を向けた先では、藤田が女性社員ふたりに手ほどきをしていた。手を使っていないのに手ほどきというもおかしなものだけれど、足の内側を正面に向けさせてそこにボールを転がし、まずはボールを止めることを教えていた。

「あーいう風に教わったこともないでしょ」

「ええ」

「ああやってボールを受け止めることをトラップっていうんだけど」

言われてみれば、何度か見たことのあるサッカーのテレビ中継にそんな言葉が出てきたような気もする。

「ずっとやっている方からすると、初めての人は何ができて何ができないのか分からなくなっちゃうんだよね」

そう言って村松は笑った。

「うまい人が好き勝手なプレイをしちゃうと初心者は何もできなくてつまらなくなっちゃうでしょ。ちゃんと楽しめてる？」

「ええ、大丈夫ですよ」

無理して言っていると思われないように、そのまま続けた。

「なんか、色々を見るところあって頭使いますよね。ジョギングの時のように他のことを考えるような余裕がないと言うのか」

凜はさっきふと思ったことを口にしてみた。

村松は凜の言葉の意味を図りかねているのか、ちょっと怪訝そうな顔をしてから、自分に納得させるようにウンウンと頷いた

「じゃあ、このあと一緒にプレーしたとき、ぼくのところにボールが来たら思い切り相手のゴールに向かって走ってみて」

いたずらっぽく言おうとしてうまくできているのか自信なさそうに村松は苦笑いした。

とっさに何を言われたのか分からず、凜は言葉を反芻してから頷いた。それを見届けると村松はくるりと背を向けてコートの方に向かっていった。

次の10分、凜は村松と同じチーム分けになった。

一旦みんな休憩したからか、男性陣は動きも良くなり、コートの中を激しく走り回り始めた。

たぶん、今日最初の10分の時の自分だったら、目を回していただろう。ボールを追いかけ回して1分も持たなかったに違いない。

いまはボールとその周りの人たちの位置を見ながら、空いている場所に少し移動することを繰り返している。

そうやっているとき、男性陣がどんなに走り回っていてもあまり焦ることはない。たまに気付いたかのように凜に向けてパスが来る。男性陣の間で交わされるような早いパスではないけれど、きちんと自分に向けられていることが感じられる。凜がその位置にいることを褒められているかのようでもあった。

男性が蹴ったボールがゴールの上を大きく越えて緑のネットに当たった。ボールはすぐにはね返ってくるけれど、そこでみんなひとつ息をつくのが分かる。

凜はふと村松の言葉を思い出した。こんなに短い間なのに息をつくまでまったく忘れていたことが自分でも意外だった。これまで知らない自分を見たようで、ちょっと口元が緩んだのが分かった。

首を振って村松を探す。

村松は左側の横の線ギリギリに立っていた。その場所にいつから立っていたのか、それまでにボールを触る機会があったのか、まったく気が付かなかった。もしかしたら、言われたことを無視しているように思われたかもしれない。

そんな凜の視線に気付いたのか、こちらをちらっと見て笑顔を見せた。ようやく思い出したか、と言っているようだった。

たぶん大丈夫だ。

相手ボールから始まる。

相手ゴールに近いところではゆっくりと男性二人でパスを繰り返す。その位置では味方の誰もそこまで走っていくことはしない。自分たちの陣地側で待ち受けている。

相手のパスにひとり、またひとりと加わって少しずつ前に進んでくる。次第にパスのスピードが上がっていく。

ふとコートの中真ん中にいた凜の脇をそれまでの何倍ものスピードのパスが抜けていった。いつの間にかこちらの陣地に入っていた相手へのパスだった。

さらに相手のふたりがこちらに走り込んでくる。それを待つようにパスを受けた男性はボールを取られないように足元に置いて相手に背を向けている。

走り込んできたふたりのうちの左を追い越していく方にパスが出る。どちらに出るのか読んでいたのか、賭けだったのか、藤田がパスの出た方向に足を伸ばしてボールを止める。その瞬間、

「ヘイツ」

村松が声を上げた。藤田はほとんど村松の方を見ずにパスを出した。ボールはコート左端に立つ村松の足元に向かっていく。周りに相手は誰もいない。

このタイミングだ、と思った。凜はコートやや右寄りから相手のゴールに向かって斜めに走り始める。

相手の陣地に残っていたひとりの脇を抜けるとき、ちらっと村松の方を見る。ちょうど足元に来たボールを止めずにそのまま蹴った瞬間だった。

ゴールとの間にもう誰もいなかった。ゴールの前にキーパーがいるだけだ。

視界の端にボールが見える。

ボールが視界の中央に近づいてくるのに合わせて、凜は足の回転を早めた。

届くのか、ボールの方が早いのではないか。そんな思いが頭をよぎる。

もうボールは体のほぼ正面まで来ている。

自分の足も同じ視界に入る。

このままではボールは自分の前を通り過ぎていくだろう。

そう思った瞬間、凜は前に出した右足をそのまま地面に着けずに思い切り前に伸ばした。

ボールのちょうど中心に右足のつま先が触れた。

そのまま体勢を崩して滑り込むように倒れながらも、足先に触れたボールの行方を目で追う。ボールはキーパーの脇を抜けてゴール右隅に吸い込まれていった。